

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 子供のいないカップルたち： 『悪魔のロベール』における不妊

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 悪魔のロベール』, 不妊, 中世フランス文学 キーワード (En): 作成者: 傳田, 久仁子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006129">https://doi.org/10.18956/00006129</a>

## 子供のいないカップルたち

——『悪魔のロベール』における不妊——

傳 田 久仁子

### 要 旨

中世フランスの作品には子供のいないカップルが数多く登場する。その描かれ方は様々であるが、子供、特に男子の誕生が家系の存続に関わる関心事であった社会において、子供の誕生、およびそのネガとしての不妊にまつわるテーマが物語においても顔を出すことは不思議ではない。これらの不妊には物語の中で解消される（子供の誕生に至る）ものと、解消されないものがあるが、解消される不妊の方はしばしば徳にも美点にも欠けることのないカップル達やがて神の介入により子供を授かるという構造を持ち、誕生した子供の価値付けとして機能する場合が多い。では神以外の力の介入により不妊が解消される場合はどうなのか。本論考は、12世紀末頃に成立したとされる『悪魔のロベール』を手がかりに、神の介入による不妊の解消と、悪魔の介入による不妊の解消との異同を探ろうとする試みである。

キーワード：『悪魔のロベール』、不妊、中世フランス文学

フランス中世においては、それほど数は多くないとはいえ、様々な作品において登場人物の不妊のモチーフが描かれる。ある時は単にある登場人物たちに子供がいないという事実として、ある時は夫や妻の子供ができないことに対する悲しみや嘆きの描写をとめないながらと、その描かれ方に違いはあるものの、不妊のカップルたちはジャンルを越えて様々な作品に顔を見せる。

もちろん、そこには聖書における不妊に苦しむ夫婦たちの反響も見て取れるに違いない<sup>1)</sup>。創世記では、齢100歳と90歳になってから初めての子どもを授かるアブラハムとサラを初めとして、その子イサクと妻リベラ、さらにその息子ヤコブと妻ラケルと三代にわたり、妻たちは不妊に苦しみ、やがて神によって息子を得るに至る。イスラエルの救い手となるサムソンやサムエルといった預言者も、不妊の女からの誕生が神の御使いによって告げられる。『ルカによる福音書』において、マリアの受胎告知の際に大天使ガブリエルは、マリアの親類であり既に年老いていた不妊の女エリザベトの妊娠によって、神にできないことはなく処女マリアの懐胎が疑いの余地のないものであることを証す。神によって解消されることになるこのエリザベト

の不妊は、洗礼者ヨハネを誕生させることになる。

新約には登場しないながらも、たとえば2世紀の外典『ヤコブ原福音書』で、不妊の末に聖母マリアの母となったという伝承を持つことになるアンナも忘れてはならないだろう。夫ヨアキムは自分だけが十二部族の系譜の中で子供を残せていないことを悲しみ、妻であるアンナは不妊である自分は呪われた存在であり、人々が嘲笑って自分を主の神殿から追い出したと嘆く<sup>3)</sup>。

このように聖書において語られる不妊は、旧約から新約にいたるまで、ユダヤ的な家族制度を反映しながら、周囲の者たち、特に子供を産んだ女達からの蔑みの対象ともなり、当事者たち自身からも「恥」として認識される場合が多いが、しかしそれらは最終的には神によって解消されるのであり、預言者や救い手の誕生を予告するものとして現れていることがわかる。ではわれわれの扱う中世の作品における不妊はどういった語られ方をするのか。地理的、歴史的な背景の違いを超え、聖書における不妊同様、やはりいったんは恥ずべきこととして周囲の目にさらされながらも神の介入の契機となり、選ばれた、特別な人物の誕生を予告するものなのだろうか。

クラウディア・オピッツは、13世紀トマス・アクィナスが、『神学大全』で、不妊が婚姻関係の解消の理由とはならないとしているとはいえ、そもそも女性が「聖書の言うごとく、男子の助力者として造られることは必要であった」理由とは、「ほかならぬ産みということのためであった」とも述べていることを指摘する。さらに、教会法学者や神学者が「肉体関係を伴わない結婚や子供のいない結婚」も認めさせようとするなか、中世後期には「子供のいない結婚は『教会の榮譽』とみなされ、子どものいない妻が聖人に列せられさえた」例を引きながら、それでもやはり結婚においては子供の誕生、しかも多産が目指されたことを指摘している<sup>3)</sup>。結婚の秘蹟が子供の誕生を目指して行なわれるものであり、子供の誕生こそが結婚を正当化するものであることは、教会においても、あるいは家系の存続に神経をとがらせる貴族階級においても共通認識であり、神学者たちの解釈にもかかわらず、不妊とは、結婚したカップルにとって、その婚姻関係の基盤を揺るがす問題であったといえる<sup>4)</sup>。不妊は神の意志によって生じるのであり、何らかの罪に対する罰であるという考え方も根強かった<sup>5)</sup>。医学の分野では不妊の原因は、男性、女性、双方の側にありうるという研究がすでになされていたが、女性の側に原因があると見なす傾向はあくまでも強かった<sup>6)</sup>。

こういった子供、特に男子の誕生が家系の存続に関わる関心事であった社会において、子供の誕生、およびそのネガとしての不妊にまつわるテーマが、物語においても顔を出すことは不思議ではない<sup>7)</sup>。しかし中世フランスの作品に登場する不妊には多くの場合、共通した特徴が見られる。中世フランス文学における子供についての調査を行なったファポールも指摘してい

るように、多くの主人公たちを取りまくように描かれる不妊は、ファブリオなどでの例を除き、ジャンルの違いはあっても、いずれも周囲からの非難を受けることがほとんどないのである<sup>8)</sup>。不妊は背景としてひっそりと書き込まれるか、あるいはプロップのいう主人公の唯一の欠損状態として選ばれながらも、ほとんどの場合そこには聖書におけるような周囲からの、あるいは作者の介入による非難や蔑み書き込まれることもなければ、現実社会ではしばしば起こりえた不妊を理由とした離婚も登場しない<sup>9)</sup>。物語の中で不妊についての描写に行数が割かれる場合でも、当事者たちの「恥」の感情ではなく、子供を得られない「悲しみ」に沈みながらひたすらに神に祈りを捧げる姿が強調され、しばしば他の点では徳にも美点にも欠けることのない身分の高いカップルたちの苦しみとして描かれることが選ばれる。不妊がもつ社会的な負の側面よりは個人的な負の側面の描写に力点が置かれ、さらには不妊以外の点についてのカップルの美点や徳が列挙されることで、現実社会における不妊が持つ負の要素が表立つことが避けられているかのようでもある。

しかし表立っての周囲からの非難の対象にならず、聖書とは扱われ方が一見異なってみえるこれらの不妊は、一方で聖書におけるのと同様、最終的には神の介入（祈りの聞き届け）によって解消される場合が多い。不妊の夫婦の美德の列挙は、少なくとも表立ってはこの不妊に関して二人に罪がないことを暗に示しつつ、やがて神によって不妊を解消されるにふさわしいカップルであることを物語冒頭から示す役割も果たしているともいえる。特に聖者伝などではこの構図がよく見られる。オットー・ランケのいう英雄出生譚における出生の困難さの一バージョンであり、その誕生に神が関わることによる主人公の価値付けである。中世フランスにおける子供の誕生を物語る作品の中で描かれる物語冒頭部の不妊とは、多くの場合、神の介入により誕生する子供（主人公）の価値付けとして機能するという構造については他の多くの物語と共通しながら、その描写に関しては社会的な負の側面にははっきりと触れられぬままに、不妊の当事者である両親たちの美德が前面に出されることで、その美德からも、物語中でやがて神によって必ず解消されるにふさわしいものとして登場しているのだといえる。

では神以外の力の介入によって、主人公たちの不妊が解消される場合はどうなのだろうか。たとえば異類婚姻譚である12世紀のマリ・ド・フランスの『ヨネック』や、12世紀末から13世紀に初頭に書かれたと推定される作者不詳のレである『ティドレル』においては、長い間子供に恵まれない領主の妻や王妃たちに子供が誕生するのは、神への祈りではなく異界の騎士の訪れによる<sup>10)</sup>。さらに12世紀末頃に書かれたと推定されている作者不詳の『悪魔のロベール (Robert le diable)』では、主人公ロベールの名に「悪魔」の語が冠されているとおり、長い間不妊に苦しんだノルマンディー公妃に待望の息子が誕生するのは、神への祈りが聞き届けられないことに疲れきった公妃がふと助力を願ってしまった悪魔の力によってである。こうした神以外の力によって不妊が解消に至る場合は、神の介入の結果としての子供の誕生の描かれ方

と違いはないのだろうか。神と対立する存在となる悪魔の力による不妊の解消でも、神の介入同様、誕生する子供の価値付けとして機能しうるのか。この疑問を手がかりに『悪魔のロベール』における不妊の解消のされ方について見ていくことにしよう。

## 1 不妊の描かれ方：解消されない不妊、解消される不妊

具体的に『悪魔のロベール』における不妊を見ていく前に、中世の作品に登場する不妊について概観しておく必要があるだろう。一口に不妊といっても、実際に物語中にあらわれる不妊にはさまざまな形があり、先に述べたように表立っての周囲からの非難の対象にならないという点では共通していても、それら全てが必ずしも子供の誕生へと至る「解消される不妊」であるわけではない。一方で、子供の誕生に至らない「解消されない不妊」も存在する。神の介入により子供の誕生する聖者伝にせよ、われわれが今回扱う『悪魔のロベール』にせよ、子供の誕生が語られる作品における「解消される不妊」とは、正式な婚姻の手続きを踏んだ夫婦が、子供の誕生を望みながら（あるいは周囲から期待されながら）、ある程度の期間にわたってその願いが叶わないものの、ついには子供の誕生に至るというものである。ではわれわれの扱うこの「解消される不妊」が「解消されない不妊」とどう違うのか、「解消されない不妊」とはこういったものなのかを確認しておく必要があるだろう。

### 1.1 明記されない「解消されない不妊（主人公の不妊）」

「解消されない不妊」には大きく分けて二つの種類がある。物語中で明記される不妊と、そうではない不妊である。特にこの明記されない不妊についてはこれまでも何人もの研究者達の興味を引いてきた。中世文学に名だたる恋人達、トリスタンとイゾーと、その夫であるマルク王、あるいはランヴァルと恋に落ちるグニエーヴル王妃、その夫であるアルチュール（アーサー）王の例を挙げるまでもなく、中世において数多く見られる婚姻関係以外の恋に身をゆだねる恋人達を描く物語において、こうした恋の主人公である妻たちには、夫との間はもちろんのこと恋人との間にも子供が誕生しない、正確に言えば子供の誕生が語られない例は枚挙に暇がない。これらの恋愛物語における子供の不在について、例えばジョルジュ・デュビーは、「結婚という合法的な子孫生産は、不実な妻たち、情熱に溺れるあまり子孫繁栄に尽すことのできないグニエーヴルたちには禁じられるのであった」と述べる<sup>11)</sup>。

しかしこれらの女性たちにおける夫との間の（あるいは恋人との間の）「子供の不在（子供についての語りの不在）」が、彼女たちの不実さや情熱による「不妊」を暗示しているにせよ、私生児の誕生の可能性が物語内に持ち込まれることが避けられたためのものであるにせよ<sup>12)</sup>、そこで物語るものが優先されているのは主人公たちの恋愛関係であり、子供の誕生が目指され

るわけでもなければ、夫との結婚生活について物語られるわけでもない。研究者達の指摘してきた通り、主人公達の背景に不妊が想定されている可能性は否定できないといえるが、たえそうであるにせよ、これらの恋の物語の中で「子供の不在」は語られる必要がなく、子供がないことが表立っての主人公達の悲しみを生む必要もないのだといえる。

もう一つ不妊とはいえないながらも、不妊同様、夫婦における「子供の不在」が想定されるにもかかわらず、夫婦の悲しみを生まないケースがある。主人公となる夫婦のどちらか一方にせよ、双方ともにせよ、自らが子供の誕生を望まず、関係を結ばない場合である。この場合、当然の結果として、結婚したカップルにおける「子供の不在」の状態が解消されることはない。たとえばフランス語で書かれた聖者伝として最初期のものに当たる『聖アレクシス伝』において、いったんは親の決めた結婚を受け入れ新婚の床へと向かうものの、神に身を捧げ純潔を守りたいという思いを断ちがたく妻を説き伏せたアレクシスの床入りの拒否と、その晩すぐの妻と両親を残しての出奔がすぐに思い起こされるだろう。トリスタンも、いったんは恋人をあきらめて同じ名前を持つ白い手のイゾーを妻に迎えながらも、やはり恋人である伯父の妻、金髪のイゾーのことが忘れられず、彼女への恋に忠誠を尽くすため、新妻と寝所をともにしながら自然の欲望にあらがい関係を結ぶことを拒否していた。彼が「もし妻と寝ることを望まなければ、／非難となって我身にはねかえり、／彼女の悪意と怒りを招くだろう。／親兄弟縁者、それ以外のすべての人間から、／憎まれ、辱められるだろうし、／第一、神に対して罪を犯すことになる。／わたしは恥辱を恐れる、罪を恐れる」と独白していたことを思い出そう。結婚をした以上、夫婦の関係を結ぶことの拒否は「神に対して罪を犯すことに」なり、「武勇の誉れ、高貴で聞こえた評判も、／卑怯腰抜けの謗りに取って代られる」であろうことが主人公自身の口から語られる。彼は身体の不調を妻への言い訳にするだろう。逆にいえばここでは言い訳が必要な状態であると考えられているのであり、やがて夫の心が別の女性にあることに気付いた妻の嘘により、トリスタンは命を落とすことになる<sup>15)</sup>。こうした自らの意志による結婚の秘蹟の拒否（その結果としての子供の誕生の不可能性）と、望んでも子供の得られない不妊との位置づけの違いは明らかであるといえる。

ファボールは、検討した中世のテキスト中、「自らの意志による不妊 (la stérilité volontaire)」の例は2例しか見当たらないとした上で、このアレクシスの妻に対する論しとトリスタンの白い手のイゾーとの関係の拒絶をあげているが<sup>14)</sup>、アレクシスの振舞いはその後いくつかの聖者伝でも繰り返されることになるだろう<sup>15)</sup>。あるいはこれにもう一例、13世紀初頭に書かれたと推定される『ボンチュー伯の息女』を付け加えることもできる。5年の間不妊に悩んだ夫婦がサンティアゴ巡礼に出た際に暴漢に襲われ、夫の目の前で妻が乱暴された後、妻は夫を殺そうとする。驚いた夫は妻を修道院にあずけ巡礼を遂行した後、妻を伴って故郷へと帰るものの、奥方と床を共にすることは拒否する。子供を授かるためのサンティアゴの聖ヤコブへの巡礼が、

結果としてむしろ子供を作る関係の拒否へと至るのであり、この段階で当然子供の誕生は阻まれることとなる<sup>16)</sup>。

こうしてみると、不妊と明記されないながらも子供の誕生しない（「解消されない不妊」の）物語とは、夫婦間における子供の誕生を描くことを物語が要請しない作品であるといえるだろう。しかし同時に、主人公達自身の振舞い（妻の側の夫以外との恋）や、自らの意志（夫の側の意志をきっかけとする）を原因とする「子供の不在（解消されない不妊）」の背後には、「解消される不妊」の当事者である夫婦達の描かれ方とは異なり、主人公達への非難の残響をかすかに聞き取ることができるようにも思える。

## 1.2 明記される「解消されない不妊（主人公の周辺人物）」

以上確認してきた二つのケースでは、物語の性質上、語られる必要のない「子供の（語りの）不在」の背後に不妊が暗示されているにせよ、本人の意志による夫婦関係の拒絶にせよ、確かに「不妊」という言葉こそ用いられていないものの、不妊と同じ結果、つまり夫婦における子供の欠如を招いていた。しかしそれはあくまでも主人公達自身に直接の原因（罪、意志）が認められるのであり、はっきりとした非難の例はトリストアの独白など例外的であるとはいえ、その色合いを読み取ることが可能な性格のものであった。もちろん聖者伝における主人公の「純潔」の希求はキリスト者としての主人公の価値付けとなるが、両親や周囲の者からの非難や嘆きを恐れて主人公達が出奔することを思い起こせば、結婚の秘蹟としての子供を持つ可能性の拒絶は、物語中でも当初の世俗の人間としての段階では通常の価値付けとして働いていないことが分かる。

けれども子供を望みながらの不妊であることが明記されながら、物語中で解消されないケースも存在する。それが主人公の周辺人物に見られる不妊である。たとえば12世紀末の作と考えられる作者不詳のレである『ガンガモール』における主人公の伯父夫婦の不妊がこれに当たる。「その才能と見目麗しさゆえに、／王はこの甥を寵愛し、／跡継ぎにしようと思っていた、／というのも、王には子供がでなかつたからだ<sup>17)</sup>」。動詞“pooir（できる）”が用いられ「子供を持つことが不可能だった」と表現されていることに注意したい。先に見た二つのケースとは異なり、王が子供を持つことを拒否していたわけではないことがこの語の使用によって示されている。しかしこの不妊はあくまでも物語の背景として解消されることのないままに終わることで、主人公の王位継承の可能性を物語内に持ち込む役目を果たすのである<sup>18)</sup>。『ポンチュー伯の息女』においても、伯父に後継ぎがいないため、主人公の夫はその土地を引き継ぎ領主となっていた。こうした例も枚挙にいとまがないだろう<sup>19)</sup>。主人公の周辺人物達の「解消されない不妊」とは、主人公の社会的地位の上昇を招き、主人公の価値付けとして機能する、物語中で解決されてはならない不妊であるといえる。そこでは悲しみこそ描写されないものの、解消

されないとはいえ、先のケースに見られたように不妊の当事者達に原因が求められるわけではなく非難の色合いも見てとれない。周辺人物である以上、その内面的描写に行数が割かれず単に子供がいないという事実の描写に終わるのは物語の要請によるともいえるが、むしろ不妊の悲しみの代わりに後継ぎとして迎えることになる主人公への愛を描くことが選ばれ、その愛情深さによって不妊の夫婦の価値付けが行なわれる場合もみられる。血を受け継ぐわけではないこういった後継ぎの誕生は不妊の解消とはいえないながら、物語の中では不妊の解消と主人公の登場が等価とされているのだともいえる。つまり明記された「解消されない不妊」とは、主人公が後継ぎとなることによってのみ「解消される不妊」となるのである。

### 1.3 「解消される不妊」：神による解消

1.2では「解消されない不妊」の中でも、主人公の周辺人物の不妊は主人公の社会的地位の上昇を導き、主人公の価値付けの役割を果たすことを確認したが、「解消される不妊」についても、神によって子供の誕生に至る場合は主人公の価値付けとして機能することははじめに確認した通りである。これについては代表例として『聖アレクシス伝』<sup>20)</sup>の冒頭部を思い起こすだけで十分だろう。1.1で見たとおり、自ら結婚初夜に妻を置いて出奔することになる「解消されない不妊」の当事者であったアレクシスだが、その彼自身は、両親の不妊の悲しみの末に、神の介入によりようやく誕生した「解消された不妊」の一人息子であった。ローマ皇帝に寵愛されていた大官である父と、高貴な生れの母との間には子供が生まれず悲しみの種となっていた。しかし二人は神に祈りを捧げ、やがて妻は身ごもることとなる。この経験が父をしてアレクシスの結婚を急がせることにもなる。ここで描かれる聖アレクシスの両親の不妊は先に確認した聖書における不妊と同じ色合いであるといえるだろう。神の介入によって、選ばれし者、すなわちここでは聖者となるべき男子が誕生する、その予告としての不妊である。ここでは両親の美点についても不妊の嘆きについても簡潔に歌われるのみだが、高貴な出である両親の「悲しみの種」となる不妊は、「心空しく」して神に祈ることによって償われるのである。もちろんこれらの作品においては、聖書におけるような神の使者との対話などによる神の直接の介入が描かれるわけではない。しかし不妊を悲しみながらも、それを恥の感情や非難、怒りといった感情につなげることなく神に祈りを捧げつけ、あるいは巡礼を行なった結果、子供を授かったという描写は、神に祈りが聞き届けられたことを示すのであり、同時に神に聞き届けられるにふさわしい祈りの形を示しているともいえる。聖者伝ばかりではない。聖者伝の要素のない、異界の妖精との恋愛譚である12世紀末から13世紀初頭の作者不詳のレ『デジレ』においても<sup>21)</sup>、主人公は両親が慈しみあいながらも不妊であることを悲しみ、神に祈りを捧げ続け、ついには聖ジルへの巡礼を行なって得られた子供であることが物語冒頭で語られる。長じたデジレは武勇にすぐれた騎士となり、やがて妖精と出会うことになるが、この聖ジルへの



巡礼の結果授かった子であったというエピソードは（しかも巡礼から家へと帰りつく前に妻が身ごもることで、巡礼の直接の結果であることが強調される）物語の中での彼の価値付けとして位置づけられる。このように神の介入による不妊の解消には、徳や美点に欠けるところのない夫婦、愛しあいながらも不妊であることへの悲しみ、神への祈り、という3つの要素が描かれるのだといえる。

ここまで「解消される不妊」と「解消されない不妊」との違いについてみてきたが、不妊という言葉が用いられない「解消されない不妊（子供の不在）」では、子供の不在を主人公が悲しむことも、子を授かるための神への祈りも描かれることはなかった。子供のいない夫婦の徳や美点についての描かれ方も「解消される不妊」とは色合いを異にし、むしろ否定的な側面がほのめかされるケースもみられた。一方不妊という言葉が用いられる「解消されない不妊」においても、神によって「解消される不妊」の描写に必須といえる（1）両親の美德、（2）愛し合っているが不妊であることへの悲しみ、（3）神への祈りのうち、（3）の不妊の悲しみと祈りが描かれることはない場合が多い。しかしその代わりに主人公が後継ぎとして登場し、主人公の価値付けとして機能するという点において、この不妊は神の介入による「解消される不妊」に近い役割を果たしていた。これらの点をもう一度確認したところで、いよいよ悪魔による不妊の解消がこれらの場合とどう違うのかを見ていくことにしよう。

## 2 「解消される不妊」としての『悪魔のロベール』

### 2.1 概要

19世紀に作られたオペラ作品としても有名な『悪魔のロベール』の中世の写本は現在二つ残されているが、そのもととなった作品はおそらく12世紀末に作られたものであろうと、A写本をもとに校訂を行なったルーゼットは推測している<sup>29)</sup>。いずれの写本においても、物語は主人公ロベールの両親の不妊から始まる。少し長くなるが、まずはそのあらすじから確認しておこう。

長年の不妊に苦しんだ挙句、神に祈るのをあきらめ、ある日、悪魔に助けを求める言葉を口にしてしまったノルマンディー公妃は、聖霊降臨祭の後、狩りから帰った夫との間に子供ができる。難産の末に誕生した息子は、幼い頃から悪魔のような振舞いを続けたため、父親も見放し追放するにいたるが、母親の懇願により騎士に叙任することを認める。しかしその後も修道院を襲い修道士たちを皆殺しにするなど、残虐な振舞いはとまらない。そんなある日のこと、周りの者たち皆から怖れられていることに気がつき、聖霊に助けられて自分を省みた彼は、自分がこれほどまでの悪人となった理由を知るために母のもとを訪れる。剣を抜いて母を詰問し、

自分の誕生のいきさつを知ったロベールは改心し、贖罪を行なう決意を固める。どのような贖罪をなせばよいのか、告解のためにローマ法王のもとを訪れるが、法王も教えを乞うている隠者から教示を受けるようにとの指示を受ける。願いを聞き届けた隠者がロベールのために神に祈ると、宙から一本の手があらわれ書き付けを差し出す。それを読み解いた隠者から、狂人のような振舞いをして人々から追い立てられること、また今後一言たりとも口をきかぬこと、犬から奪った食べ物しか口にしないことという三つの贖罪を全うしなくてはならないと告げられるや、彼は喜んでこの苦行に身を投じる。しかし身を寄せた宮廷で10年の間、贖罪を続けるうちに、皇帝がトルコ軍に攻め込まれる。トルコ軍優勢の中、皇帝が出陣するのを見ても何も出来ずに嘆くロベールのもとに、イエス・キリストの使者と名乗る純白の騎士が訪れ、戦いに赴くことが許される。ロベールは白銀に輝く甲冑と武具を渡されるや、誰も知らない謎の騎士として獅子奮迅の働きを見せ、たった一人でトルコ軍を打ち負かす。このような戦いが三度繰り返され、その度に、彼の姿をひそかに目にしていた口のきくことのできない皇帝の息女だけが、謎の騎士の素性を知ることとなる。皇帝は謎の騎士を探すため、お触れを出す。それに乗じ、姫を我が物にしようともくろみ続けてきた家令は、にせの白銀の甲冑を用意し傷まで真似て、謎の騎士になりすまそうとする。あわや家令が白銀の騎士として、また姫の夫として皇帝から迎えられようとしたその時、それまで口のきけなかった姫が突然口を開く。しかし姫や人々の懇願にもかかわらずロベールは口を開こうとしない。最後に苦行を教示してくれたあの隠者があらわれ素性を語るよう求めると、ついに口を開き、彼こそが白銀の騎士であることが明らかになる。皇帝は息女を娶って自分の国を治めてくれるよう、またそこに居合わせた故郷の騎士たちは、父親であるノルマンディー公亡き今、領地を治めに戻ってくれるよう、それぞれ彼に懇願する。けれどもロベールは神に身を捧げる道しか選びたくはないのだと告げ、隠者とともに去り、隠者亡き後もその庵で一生を終えて聖者となる。

この悪魔の血を引いたかのような振舞いからある日突如として改心し、驚くべき贖罪を果たしながら、異教徒との戦いを神の意思により勝利に導いた後、神に捧げられた生涯を送ることになる聖者の物語の中で、われわれの興味を引くのは主人公ロベールの懐妊と誕生にまつわる場面である。ロベールの母の懐妊については、エリザベス・ゴシェも、アレクサンドル・ミシャも、ロベール・ボロンの『メルラン』における、夢魔 (incube) によって懐妊した乙女との類似を指摘している<sup>29)</sup>。ゴシェは次のように指摘する。「主人公 (=ロベール) の超自然的な誕生は、メルランの受胎のドラマに似た、家族のドラマに組み込まれている。一方は夫婦の不妊、一方はある一人の悪魔による執拗な攻撃という試練によって、犠牲者たちは不用意な言葉を口にしてしまう。ノルマンディー公妃 (=『悪魔のロベール』の妻) は絶望と怒りに負ける。ロベール・ボロンの物語 (=『メルラン』) においては、父親、次いで上の娘が絶望と怒りに負けていったのと同じように。悪魔はこういった苦悩 (悲嘆) を利用して、彼の被造物を生み出

す。ロベールは確かに、公が自分の妻と同衾しての、自然な性交渉から誕生するが、それでもロベールの誕生には悪魔の力添えがあったことに変わりはない。一方メルランはといえば夢魔によって受胎された。この二つのケースにおいて、精神的なものであれ、肉体的なものであれ、悪魔への従属（忠誠）の罪の責任は、善と悪との間に引き裂かれた人類の母胎たるイブの末裔である母親にある」<sup>41</sup>。

確かに悪魔の介入による誕生という点でロベールの誕生と重なるメルランの物語には、しかし不妊のモチーフは登場しない。ここではわれわれはむしろメルランとの相違点、つまり正式な夫婦の不妊の末に誕生するロベールと、未婚の乙女の眠りに乗じて悪魔が受胎させたメルランとの違いを確認したうえで、ロベールの誕生の描写について、物語の筋に沿いながら詳しく見てみることにしよう。

## 2.2 ロベールの誕生の描写

### 2.2.1 ノルマンディー公夫妻の不妊の悲しみ

ロベールの両親であるノルマンディー公夫妻についての描写は、いずれも物語の冒頭部に当たる。まずは13世紀後半に作られたと推定されるA写本をもとにしたルーゼット本から見てみることにしよう。主人公の父親となるノルマンディー公の美点の列挙は「立派な人物であって、家柄も大したものであった。大変な勇気の持ち主、気品高く、智勇にすぐれ、武器をとれば強い武者ぶりだった」(vv.5-8)と続くが、次の一文が特にわれわれの興味を引く。「公に仕える諸侯は、公の最も旺んな年代に、公に勧めて、騎士たちは妻を娶られるようにと申し上げた」(vv.9-12)。結婚は時期を逸したのではなく、「旺んな年代に」というのは、直訳すれば「彼の最も良い年代に (El point de son millor aé)」(v.10) (ミシャによる現代フランス語訳では、“Quand il fut à la fleur de l'âge”)となり、老年になってから、つまり子供を受胎させる活力が衰えてからの婚姻ではないことが示されているともいえる。不妊について夫の側に原因がある可能性が、あらかじめこの一文によって薄められているのである。そこで公の承諾を受け、家臣達が連れてきたのは「さる伯爵の息女にあたる乙女」(v.16)であり、ここでも美点の列挙が続く。この「たいへんに高い家柄、美しく、優雅で気だてのよい乙女」(vv.19-20)との結婚が豪華に行なわれたことが短く記された後、不妊についてが語られる。「公と公妃は、仲睦まじく長年連れ添ったらしいのだが、子どもに全く恵まれなかった。どうしても授からないのだ、聖ビエール様や天なる神にいくら願をかけ、祈ってみても。これが二人にとって大きな悩みの種だった (Et l'un et l'autre forment coste)」(vv.25-31)。“coste”は、動詞 *coûter*, *coûter de la peine* で「苦しむ」となり、ミシャによる現代語訳では“ils en étaient fort atristés” (彼らはそのことでとても「悲しんだ」)となる。

同じ部分が、14世紀末から15世紀初頭のものと考えられているB写本をもとにしたゴシェ版

によればこうなる。ルーゼット版と比べると、公と公妃の美点は、公の武者ぶり（*vasselage*）と公妃の家柄の高さ以外には特に語られないが、ともに暮らした年月の暮らしぶりは、“bien” “bel” “loiaument” とほめたたえられる。しかし15年間の長きにわたって二人に子どもができることはない。神、聖ペテロ（聖ビエール）、そして聖母マリアへの誓いや祈りによっても、彼らには子どもができなかった。「奥方はそのことでとても苦しむ（*La dame en fu moult esmarie*）」（v.14）。ゴシェによる現代語訳では“*La duchesse en éprouva un violent dépit.*”となる。一方「公は子どもを持ってないということを嘆いた（*Li duc en eut son coer dolant / De chou qu’u’avoir ne pot enfant.*）」（v.15-16）。こちらの版では美点が列挙されるわけではなく、結婚時の夫の年齢を示すような記述もなく、長きにわたる不妊の原因にも触れられていないが、アリエノール・ダキテーヌとルイ7世との婚姻期間を思い起こさせるような、15年という不妊の期間が設定されている。

こうしてみると、双方の版ともに、神の介入により「解消される不妊」で確認した、（1）夫婦の美德と、（2）愛し合っているが不妊であることへの悲しみ、（3）神への祈りの3点については、それぞれ長短はあるにせよいずれも欠けてはいないことが分かる。ただしルーゼット版では夫婦二人の苦しみとして等しく描かれた不妊の苦しみ（悲しみ）が、ゴシェ版では、妻の感情を示す表現の方のみに激しさが増している。妻の形容に用いられている語“*esmarie(e)*”は動詞“*esmarier*”からの派生語だが、これは「理性を失わせる（*faire perdre la raison*）」、「道に迷わせる、惑わせる（*égarer*）」、「（精神を）乱す、動揺させる、不安にさせる（*troubler*）」、「狼狽させる、調子を狂わせる（*déconcerter*）」などを意味する動詞である。ゴシェがその現代語訳として選んだ“*un violent dépit*”も、「はげしい悔しさ」「いまいましさ」「恨み」などを意味する。14、15世紀と時代の下ったB写本においては、これまで見てきた不妊の妻たち、特に神の介入により不妊を解消されるにふさわしい妻たちとは異なり、ノルマンディー公妃は悲しみに沈むのではなく、悲しみを逸脱した理性の喪失や乱れを示す姿によって、神ではなく悪魔の介入を招く主人公としての性格を冒頭から垣間見せているのだともいえる。

ルーゼット版では、中世フランスの異類婚姻譚でも、しばしば人間が妖精と出会う不思議な出来事の起きる日として選ばれる聖霊降臨祭の季節に事件は起こる。夫が森へ狩りへ出かけ一頭の鹿をつかまえたという一行の後、「公妃は悲しみに沈んでいた。子宝に恵まれなかったからだ（*La duchoisse a le coeur dolant / Qu’ele ne pot avoir enfant*）」（vv.35-36）と記される。B写本でも時期についての言及はないものの、夫は狩りに出かける。しかしここでもA写本に比べ、奥方の感情の描写はかなり激しいものとなっている。「奥方は自分の部屋で怒りに身をまかせ、深い悲しみに沈んでいた（*Et la dame remast irie / En sa chambre et moult courecie.*（現代語訳 *la dame resta dans sa chambre, en proie au chagrin et à la colère*）」（vv.19-20）。

奥方の感情を示すのに二つの語、つまり“irrité”“emporté”“furieux”“farouche”などを意味する“iri(e)”と“fâcher”“courroucer”“vexer”“outrager”“affliger”や、名詞としては“chagrin”“violent”を意味する“courecier”とが選ばれているが、このどちらも悲しみというよりは怒りや苛立ちに近い意味を持つ語である。これが神への冒瀆と悪魔への助力の願いの独白がはじまる直前の、奥方の精神状態の描写となる。

ロベールの誕生の場面における、ある意味クライマックスともいえる公妃の嘆きは、ルーゼット版では約10行ほどの独白である。「『神さま、と妃は言う、なんてわたしを憎んでらっしゃるの、子どもをお授けくださらないなんて！ 力よわく、みじめな女にも、子どもをお授けなさる。ところが、こんなに恵まれているわたしが全然、恵まれないのです。神さま、あなたはわたくしに、全然、力をおかし下さらないのですね』『悪魔よ、と妃は言う、どうぞわたしのこと、心にかけて頂戴。もしわたしに子どもを授けてくれたら、これからずっとあなたに祈りを捧げるわ』ここで妃はベッドに倒れて気を失った。正気に戻ったときは、大変に自責にかられたのである」(vv.37-48)。一方ゴシェ版での独白は約60行近く続くが(vv.21-80)、彼女は神が自分をこれほどまでに美しく創り、この世にこれほどまでに美しい自分を送り出しておきながら、不妊(“brehaigne”は“stérile”、主に女性の不妊、あるいは土地などの不毛について語る時に用いられる語)にすると罪であると神を難じる(vv.21-29)。この後、貧しい女達さえ幾人も授かる子供を、善良さにも、富にも、美しさにも欠けるところのない自分が得られないことへの神への嘆きが続き、悲しみのあまり涙に暮れる彼女を怒りがとらえる。神の介入により不妊を解消された女性たちも、確かにその美しさや家柄の良さ、善良さを賞賛されてはいた。しかしそれは他者(作者)からの評価であり、自らそう口にするノルマンディー公妃の言葉からは、彼女の性格付けとして「傲慢さ」が与えられていることが伺えるだろう。さらにその嘆きについての描写に注目しよう。「その時、彼女は嘆きにのみこまれた。涙が心から彼女の身体の中をのぼっていき、その両目からあふれだした。公妃は、あまりにも激しい怒りと悔しさに駆られたので、ある考えが心に浮かんだ。彼女の絶望はあまりにも深かったので、悪魔はこの折りに彼女を神への不信仰へと導いた」(vv.56-63)。

ゴシェは『悪魔のロベール』における母の罪について考察した論文の中で、彼女の犯した罪が「言葉の罪」であることを指摘している<sup>26)</sup>。彼女が口にしたのは、もっとも重い罪の一つとされた神への非難の言葉、さらには激情に駆られての、悪魔への呼びかけと同時に行なわれた神への侮辱であるが、その発端は行き過ぎた悲しみが怒りや悔しさに変質したことによる。この激情に身を任せてしまうこと自体が、神の介入によって不妊が解消されるにふさわしくない彼女の姿を示すものとなっている。「私はあなた(悪魔)に、子供を授けてくれるよう祈ります。なぜならあなたは我らが主であるイエスよりも大きな力を持っているからです。私はあなた(悪魔)の側から、子供を得たいと望むのです。それが狂気の沙汰であれ、正気の沙汰であ

れ」(vv.76-80)。この言葉と共に公妃は気を失う。悲しみが祈りと結びつくことなく、ついには悪魔が神より強大な力を持つとまで口にする事で神への侮辱へと向かってしまったことで、公妃は「神の介入によって解消される不妊」の妻たちからは遠く離れたところへと歩を進めてしまうのである。

### 2.2.2 悪魔の介入の形

こうしてみると、確かにゴシェも指摘するとおり、この悪魔の介入の原因となった罪はひとり妻の側にあるといえる。しかし夫の側の罪もこの妻の嘆きの後に初めて生じてくる。

妻による神への侮辱と悪魔への呼びかけの直後、間髪をいれず夫が狩りから戻る。そこで夫が目にするのは美しく魅惑的な自分の妻の姿である。ルーゼット版では、夫は突然妻への強い欲望にとらわれると、そのまますぐさま妻をベッドへと運ぶ。ゴシェ版では寝室に向かった夫に対し扉を開けた妻の側が夫の首に腕を回す。もっともくちづけを何度も降らすのは確かに夫の側だが、「妻はそれを拒まない (Car bien y a son habandon.)」(v.96) と書かれることで誘惑する妻の姿がほめかされる。ベッドへと向かう二人の描写はルーゼット版でもゴシェ版でもほぼ同一である。「妻をベッドへ運ぶと、すぐに、快楽をほしいままにした。ああ！ 邪な歓楽の限りを尽したので、公妃の胎内にこのとき蒔かれた種から、やがて生まれた息子はいかなる良いことももたらさぬであろう。奸智に長けた悪魔こそ、この一件に入れ知恵したのである」(vv.62-68)。悪魔の介入とは、実際には夫が妻に抱いた欲望という形をとっていることがわかる。中世において妻に対し激しい欲望(情熱)を抱くことは罪とされたが、ここでの悪魔の介入とはこの欲望を夫の中に生じさせることに凝縮されるのである。確かにゴシェ版では誘惑する側となった妻に罪があることがほめかされているが、この欲望によって、ロベールの誕生に悪魔を介入させるにあたっての夫の側の罪も生じることになる。とはいえそれは自発的なものではなく、悪魔の力の影響下でのことである。夫の罪は最初から薄められている。しかしむしろここで重要なことは、『メルラン』におけるように、直接悪魔が人間の女性と交わるわけではないという点である<sup>26)</sup>。悪魔が介入した、罪深い情熱の結実とはいえ、ロベールがあくまでも正式な夫婦間に誕生した子供であることを覚えておくことにしよう。

### 2.2.3 悪魔の介入により誕生した子供の力

懐妊を喜ぶ周囲の者達とは違い、悪魔に助力を願ったことをひとり知る妻は妊娠がわかっても喜ぶことができないという描写は両写本に共通である。ルーゼット版では「気持ちを押さえさせること甚だしい。というのも、このことに神さまの関わりはなく、どんな良いこともないとわかっていたからだ」(vv.70-72) と書かれる。また「胎内の子のため、大いなる苦痛を味わい、苦しむこと一週間、奥方は一睡もせず、休む暇もない。そのあげく生まれた男子は、世に

も醜い餓鬼だ」(vv.83-86)とされ、陣痛の異常な長さは悪魔の介入の印として描かれていることがわかる。ゴシェ版でも陣痛の苦しみは一週間続き、奥方は眠ることも休むこともできない。ようやく誕生した息子はこちらでは、「悪が存在 (moult male chose)」(v.134)と表現される。

ここからはロベールがいかに悪魔の力の影響下にあるかが、悪魔の介入を示す力の発現のいくつものエピソード(外見(並外れた美しさ、大きさ)、力の強さ、残虐非道ぶり、成長の速さ)により描写されていく。生まれてすぐに乳母たちを困らせるのはもちろん、ゴシェ版では乳を飲むときでさえ眠らないと書かれる。ゴシェも指摘している通りこれは『ティドレル』における異界の騎士の息子の不眠を連想させるが、デュボストによればこの不眠とは悪魔の印とされていた<sup>70)</sup>。さらに、やがてたちまち発揮されはじめる常軌を逸した乱暴さと並んでの、並外れた成長の速さも悪魔の介入の片鱗を示すことになるだろう。彼が並ぶ者のない美しさを示すようになることも、ここでは肯定的に描かれているとはいえない。ロベールの誕生に悪魔が介入したことが周囲に気づかれることはないが、途方もない美しさと身体の大きさを持つロベールがついに人を殺めるようになり、そのあまりの残虐非道ぶりに父親は20歳になった彼を館への出入り禁止とし領地の外に追放する。この息子の見放しによって、父親のロベール誕生について悪魔の介入への加担の罪はさらに薄められるといえるだろう。罪を重ねるのはまたしても母の側である。母親の懇願により父は追放していたロベールを騎士に叙任することに同意する。しかしロベールの残虐な振舞いは、ある日突然訪れることになる改心の日まで続く。これらのエピソードは、神の介入によって誕生した主人公たちとくらべても、よりはっきりとした人間社会からの超越性、逸脱性を示しているといえる。

#### 2.2.4 改心による罪の移行と、力の性質の変化

ロベールの改心は唐突に訪れる。ある日周囲の誰もが自分を恐れていることに気がつく、なぜ自分がこんなにも悪い人間となったのか、その理由を問いただしに母のもとへと向かう。この突然の改心は「聖霊」(v.390)の助けによる。この神の側の介入による突然の改心の瞬間を迎えるのと同時に、母親の罪がクローズアップされることに注意しよう。自分の側の原因も認めつつも、「この酷い状況が自分に訪れたのは、その出生によってであり、それは自分の母親が、その際に罪を犯したからだ、母は自分に対し一度も明らかにしたことがないのだ」(vv.384-386)とロベールは考える。この瞬間ロベールがそれまでに犯した罪の責任が、一挙に母親の側へと移行させられるのが見て取れる。それは父にでなく、悪魔にできなく、母親の罪へと向かうのである。

母の側も、剣を抜いてなぜ自分がこのような人間になってしまったのかその原因を問いただす息子に対し、彼の出生は自分が悪魔に助けを乞い願ってしまった結果であり、神の関与が一切ないことを語る。この母の自らの罪を認める告白により、ロベールの罪の最初の減免が始ま

る。

こうして母のもとを去り、国を去って、贖罪にとりかかる決意をしたロベールは、隠者の助けを得て、神からの直接の贖罪の提示を受けるに至る。さらに隠者によりロベールの罪が許された際、彼の中に「悪魔の取り分がなくなった (Ne diables n'ot en lui part)」(v.913)と書かれてからは、子供時代の乱暴、狼藉、青年時代の残虐非道ぶりは、常人では耐え難い驚くべき贖罪に耐えうる力や、トルコ軍を一人で敗走させるような並外れた武勇へと変化する。しかしそこで描かれているのは、あくまでも常軌を逸した同じ力をもつ、表裏一体となる片方の側面であることが分かるだろう。

ここからは加速度的に神の介入が描かれ、さらにロベールの力の性質にははっきりとした変化が生じていく。口を一切きいてはならず、犬の口から奪ったものしか食べてはならず、人からは狂人だと思われなければならないロベールがローマ皇帝の館で得た居場所は、犬と同じ寝場所であるが、それは皇帝の礼拝所でもある。聖アレクシスの流浪と最後に両親の家のきざしを命を終える姿が思い起こされる。さらに贖罪を10年続けた後、神からの御使いがロベールに武具をもたらすと、悪魔的な側面が前面に出ていた彼がかつて持っていた他を寄せ付けない強さは、神の意志を受けた武勇へと変化し、たった一人で異教徒であるトルコ軍を敗走させる。

物語の最後で、主人公が「聖ロベール」となるに至るこの『悪魔のロベール』において、神のこうした介入が描かれることは当然であるといえるだろう。しかし注目すべき点は、ロベールの力がここにきてはじめて武勇にすぐれた実の父親の血筋であることと結び付けて語られることである。悪魔が関与したことでロベールに宿った力のもつ危険な要素は、改心の瞬間にあらためて母親へと移行させられ、さらに神の力添えにより薄められる。途方もない力であることには変わりはないながら、その向けられる方向性により性質を変えるのである。さらに物語の最後に至って、父親との血のつながりが物語に再登場することで、メルランの場合とは異なり、血のつながった父があくまでも人間であることが、ロベールの性格づけ、位置づけと無縁ではないことが強調されるともいえる。

神以外の力の介入によって不妊が解消される『悪魔のロベール』においても、悪魔が介入することによる主人公の価値付けは行なわれる。物語冒頭では、作者の介入により、ロベールの誕生によって良いことは一つも生まれず、悪の申し子であることが繰り返し語られていた。しかし物語冒頭では否定的な側面ばかりがクローズアップされた彼の持つ「力」は、物語の進行に従い、その強大さはそのままに性格を変えていく。悪魔の介入が、父親に妻への激しい欲望を抱かせるという間接的な形を取り、悪魔の介入を許した罪自体も、母親の言葉の罪へと再度移行させられ、ロベールの誕生における悪魔の介入に留保がつけられる。それと同時に、ロベールにとっては、誕生時に悪魔の介入があったことこそが、むしろ逆説的に誕生後の神の介入を招く結果となっていく。ロベールだけに目を向けるならば、神の介入による不妊の解消のヴァ



リレーションと考えることさえ可能だといえるだろう。法王でも直ちには贖罪を考えられないほどの残虐非道さは、結果として、神が贖罪の内容を直接決定するという状況を招く。その贖罪の厳しさは、それを乗り越える超人的な主人公のキリスト者としての姿へとつながる。しかし一方で、その超人ぶりにせよ、神の御使いによる神の武具の貸与にせよ、ロベールの、人間離れした武勇＝力をさらに活かすためのものとして働き、彼が生まれながらに持っていた、神の介入以前の悪魔的な力の強さの、魅惑的な側面を強調するのである。

しかしあくまでもこれらの神の介入は、ロベールの誕生に関する悪魔の関与が、母親の罪によるものであることはもちろん、父親の欲望を生じさせたことにのみ存し、実際に母親を受胎させたのがあくまでも実の父であるノルマンディー公であり、悪魔ではないことによって可能になっているともいえる。贖罪の開始より前に、すでに隠者への告解によって、ロベールにおける悪魔の取り分がゼロとなったことへの言及がそれを示してもいる。悪魔を思わせたはずのロベールの力の発露は、神の関与を経て、父親、あるいは一族代々の武勇にシフトさせられる。このテキストでは主人公は一族の土地を継ぐことはないが、後に、皇帝の息女をめとり、彼が一族の地を継いでいく物語が編まれることになることも領ける。

悪魔の介入により「解消される不妊」においても、神の介入により「解消される不妊」におけるのと同様、主人公の価値付けは、悪魔という「外部の力」の取り込みによって生じる。しかし神の介入とは違い、そこには慎重に排除しなくてはならない因子が多い。『ティドレル』や『ヨネック』の不妊の解消においては、直接、異界の騎士の血を引く子供たちが誕生したが、『悪魔のロベール』においては、悪魔の直接の血による不妊の解消ではなく、神の介入同様、あくまでも血においては人間の高貴なる一族の（ノルマンディー公家）直系の純血を守る。たわめられた「外部の力」だけを主人公に手に入れさせるために迂回路が周到に用意されているのだとはいえないだろうか。神の介入による不妊の解消と比較すると、父親の罪こそ減免されているとはいえ、両親の美德はいったんは描かれながらも、その後の罪によって減じられていた。とりわけ母親の不妊の悲しみは限度を超え、傲慢さも垣間見せながら、過度の怒りへと進む。神への祈りは、神への侮辱にとってかわられる。介入者が神であるにせよ、悪魔であるにせよ、「解消される不妊」とは、外部の力の介入の契機となるものであるが、この不妊の両親の位置づけの違いは、やがて生まれる子供の持つべき力から、その負の要素を取り除くための役割を果たすものであるともいえるだろう。悪魔の血を直接受け継ぐことは最初から回避されているにもかかわらず、さらにその危険性が最終的には両親の罪（責任）という形で排除されることで、排除されるべき要因を持つ外部の力があわせ持つ魅惑的な側面の取り込みが可能となり、物語の中で主人公の力は無事保存されうるのだといえる。悪魔の血を直接介さないことにより、悪魔の力が持つと期待される他を圧する強さと、まがまがしさの二重性のうち、まが

まがしだけが慎重に取り除かれる。それはこの作品における不妊への悪魔の関与の仕方の設定により可能となっているとはいえないだろうか。主人公の両親の「不妊」（と罪）という設定は、そのために必要不可欠なものであったといえるのである。

## 注

- 1) Danièle Alexandre-Bidon, Didier Lett, *Les enfants au moyen âge V<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles*, Hachette, 1997 あるいは Sylvie Laurent, *Naître au moyen âge, de la conception à la naissance : la grossesse et l'accouchement (XII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècle)*, Le Léopard d'or, 1989 の chapitre III, La peur de la non procréation : la stérilité を参照。
- 2) 『ヤコブ原福音書』は、『聖書外典偽典6 新約外典I』、八木誠一・伊吹雄訳、教文館、1976年、に所収。あるいは、岡田温司『処女懐胎』、中公新書、2007年参照。なお13世紀ジェノヴァの大司教であり、ドミニコ会士であったヤコブス・ア・ヴォラギネの『黄金伝説』では、聖アンナは、不妊で苦しみマリアを授かった後は、夫なき後、結婚を重ね、マリア以外にも多くの子供を産む多産の母ともなっていく。
- 3) クラウディア・オピッツ「束縛と自由（1250-1500年）」、ジョルジュ・デュビイ、ミシェル・ペロー監修『女の歴史Ⅱ中世』、杉村和子・志賀亮一監訳、藤原書店、1994年、所収、pp.464-465。
- 4) ジョルジュ・デュビー『中世の結婚』、篠田勝英訳、新評論、1984年、参照。
- 5) 例えばアリエノール・ダキテーヌは不妊について、クレルヴォーのベルナルに相談する。クラウディア・オピッツは、前掲書において、神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世赤髭王の妻、ベアトリス一世の不妊（ただし最初の子供たちを亡くして後の不妊）に関して、12世紀中頃、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンに不妊の神へのとりなしを頼んだブルゴーニュの5人のシトー会修道院長たちの手紙の例を引いている（p.467）。とはいえオピッツは、子供の誕生を望まない女性たちも当然存在したことも指摘している（p.470）。
- 6) Sylvie Laurent, *op.cit.* を参照。
- 7) デュビーは前掲書で次のように述べている。「文学的な創作の場合も、アンドレ・ル・シャブランの恋愛術と同じように、結婚というもののまわりを巡っているように思われる。はっきりと結婚を話題にするわけではないが、そちらのほうへ否応なく向いてしまうのである。というのも、結婚の夢をむさぼる『若者集団』の心の中では、さまざまな衝動が対立していたからであった。彼らは自分たちを排除している婚姻制度を根底からくつがえそうと夢みるかと思えば、同時にこのような排除の状態を脱しようと願っていてもいた。あらゆる障害を乗り越えて結婚することが、彼らの願いであった。したがって、どのような冒険の果てにも、ひとつの蜃気楼が輝いている。完璧な女性を自分のものにして、受胎させ、立派な息子をつくるということである。結婚の価値は、物語の筋立てのいっそう奥深いところにおかれていた」（pp.364-365）。

- 8) Jens N. Faaborg, *Les Enfants dans la littérature française du Moyen Age*, Etudes Romanes 39, Copenhagen, Museum Tusculanum Press, 1997.
- 9) たとえばアリエノール・ダキテーヌはルイ7世との間に7年の不妊の後、長女と次女を産むが、15年間の結婚の間に男子が誕生しなかったことは離婚の理由の一つともなる(ジョルジュ・デュビー『十二世紀の女性たち』、新倉俊一・松村剛訳、白水社、2003年、参照)。他にも様々な例があげられる(ヨアヒム・ブムケ『中世の騎士文化』、平尾浩一他訳、白水社、1995年、参照)。
- 10) 『ヨネック』においては、年老いた領主の夫との間に7年以上子供ができず、塔に幽閉されている妻のもとに、大鷹に変身した騎士が訪れ息子が誕生する。『ティドレル』では、王と「こよなく愛し」あいながらも10年間子供のできない王妃が、ある日一人で果樹園で昼寝をし、目覚めると湖の中を行き来する騎士が訪れ息子と娘が誕生する。『中世ブルターニュ妖精譚』、関西フランス語研究会、1998年、所収。
- 11) 前掲『中世の結婚』、p.366. Patricia Victorin, «La Reine Yseut et la Fée Morgue ou l'impossible maternité dans Ysaïe le Triste», *Bien Dire et Bien Apprendre* 16 (La Mère au Moyen Age. Actes du colloque du Centre d'Études Médiévales et Dialectales de l'Université de Lille III, 1998 も参照のこと。
- 12) 「こうして姦通は成就するが、しかしそこから子供が生まれることはない。実際、私生児が生まれることについては、深刻にならざるをえなかった。そのような事態を怖れすぎているのだろう。私生児誕生は、話の種にするには、あまりに慎みを欠く話題だったのである」(前掲『中世の結婚』、p.361.)。
- 13) 『聖アレクシス伝』、神沢栄三訳、およびトマ『トリスタン物語』、新倉俊一訳は、『フランス文学全集1 信仰と愛と』、白水社、1990年、より引用。
- 14) Faaborg, *op.cit.*, p.47.
- 15) 例えばデュビーは、前掲書で、聖シモン伝での新婚の床の拒絶の例を挙げている(p.207)。
- 16) 『フランス中世文学集3 笑いと愛と』、白水社、1991年、所収。ただし奥方が夫を殺害しようとした咎で海に流されて以降の物語には、不妊はまったく関与しないどころか、むしろ庶子を含め、後継ぎたる男子を3人も産む多産の妻へと変身をとげていくが、不妊が解消された理由はいまのままであり、少なくとも巡礼の直接の結果として描かれているとはいえ、この作品での夫との間の不妊は、その結果起こった事件と、異教徒の間の婚姻と出産(庶子)という奥方の二つの経験を経て、はじめて解消される。
- 17) 『ガンガモール』、拙訳、前掲『中世ブルターニュ妖精譚』所収、p.33.
- 18) ただし、やがてガンガモールを「ポティファルの妻」と同じ形で誘惑することになる王妃の、グニエールなどと共通する性格付けから、この不妊を1でみたタイプと理解することも可能。
- 19) フランス中世だけでなく、子供のいない王夫婦に拾われたオイディプスや、王女に拾われたモーセがすぐに思い起こされる。
- 20) この作品の成立については、*La vie de Sanit Alexis*, édition critique par Maurizio Perugi, Droz, 2000 参照。

- 21) 『デジレ』、森本英夫訳、前掲『中世ブルターニュ妖精譚』、所収。
- 22) 『悪魔のロベール』には写本が二つあり、A写本に基づいたものには、*Robert Le Diable, Roman d'aventure*, publié par E.Lôseth, Librairie de Firmin Didot et Cie, Paris, 1968 (以下これをルーゼット版と呼ぶ)、その現代語訳である *Robert Le Diable, traduction et présentation par Alexandre Micha*, GF Flammarion, 1996 がある。『中世文学集3 笑いと愛と』所収の『悪魔のロベール』、天沢退二郎訳、白水社、1991年もこのルーゼット版からの日本語訳であり、引用はこれに従う。B写本に基づいた校訂版には *Robert le Diable, édition bilingue, publication, traduction, présentation et notes par Élisabeth Gaucher*, Champion, 2006 (以下これをゴシェ版と呼ぶ) があり、日本語は拙訳である。以下それぞれの引用は行数のみを示し、特に断りのない場合はルーゼット版による。
- 23) Élisabeth Gaucher, «Fils du diable, héros rédempteurs : Merlin et le Robert le Diable», *Merlin. Roman du XIII<sup>e</sup> siècle. Robert de Boron*, ouvrage dirigé par D.Quérel et Chr. Ferlampin-Acher, Paris, ellipses, 2000, pp.61-72. 花田文男「ロベール・ド・ボロンにおけるメルランの誕生」、『千葉商大紀要』第32巻、第1・第2合併号、1994年、pp.95-119と、同「メルランの誕生」、『千葉商大紀要』第31巻、第1・第2合併号、1993年、pp.43-69を参照。
- 24) Élisabeth Gaucher, *op.cit.*, p.14. なお括弧の中の注は引用者による。Doris Desclais Berkvam も *Enfance et maternité dans la littérature française des XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles*, Champion, 1981でこの点についてふれている。
- 25) Élisabeth Gaucher, «La mère coupable dans la légende de Robert le diable (XII<sup>e</sup>-XIX<sup>e</sup> siècles)», *Bien Dire et Bien Apprendre 16 La Mère au Moyen Age. Actes du colloque du Centre d'Études Médiévales et Dialectales de l'Université de Lille III*, 1998, pp.133-144. ゴシェは、12世紀の神学者たちが、ののしり (la blasphème) を、傲慢さと怒りの結果生じるものであると断じていることを指摘し、公妃の罪がこれにあたり、ロベールの口をきくことの禁止などの贖罪もこれに呼応すると考察している。
- 26) もっとも『メルラン』においても、身に覚えのない妊娠に気付いた母親は司祭のもとをおとずれ、お腹の子供に悪魔の力が及ぶ前に神の許しを乞うことによって、悪魔の力は薄められる。
- 27) Francis Dubost, «Yonec, le vengeur, et Tydorel, le veilleur», *Et c'est la fin pour quoy sommes ensemble, Hommage à Jean Dufournet*, tome I, pp.449-467, Champion, 1993.

(でんだ・くにこ 国際言語学部准教授)

